



TITLE:

バルザックの「意志論」

AUTHOR(S):

村田, 京子

---

CITATION:

村田, 京子. バルザックの「意志論」. 仏文研究 1984, 13: 180-208

ISSUE DATE:

1984-02-07

URL:

<https://doi.org/10.14989/137676>

RIGHT:

## バルザックの「意志論」

村 田 京 子

### 序

バルザックは、*La Peau de Chagrin*の序文で、作家について次のように論じている。

L'écrivain doit être familiarisé avec tous les effets, toutes les natures. Il est obligé d'avoir en lui je ne sais quel miroir concentrique où, suivant sa fantaisie, l'univers vient se réfléchir.<sup>1)</sup>

バルザックにとって、作家の魂は、世界全体がそこに反映してくる鏡であり、その鏡には宇宙の根源をも映しだされねばならない。彼は、人間や事象すべてを動かしている始原の原理の存在を固く信じていた。この原理は、「単一なものであり、創造物である前に原動力であり、結果である前に原因<sup>2)</sup>」であった。絶対であり、あらゆる形を帯びる力を持っている、この始原の原理の運動の出発点を捉えれば、神の創造の秘密を手に入れることができる。一切を支配する絶対的な生成の原理を探ること、これが、バルザックが自らに課した問題であった。彼は『人間喜劇』という巨大な体系を作り上げたが、『風俗研究』においては、感情とその動きを、生とその動態を対象とし、『哲学研究』においては、生の依拠するもの、人間や社会を存在せしめる究極の原因を考察の対象とした。『風俗研究』は結果を、『哲学研究』では原因を描き、『分析研究』では原理を探究しようとした<sup>3)</sup>。

バルザックが真理を引き出すのは、顕微鏡的な緻密な分析によってではない。一瞬の直観力によって表層を貫き、内面の奥深くにまで浸透し、真理を把握するのである。この優れた直観によって生み出された、バルザック独自の哲学思想が、「意志論」(*Traité de la Volonté*)である。

「意志論」の構想は、バルザックの最も初期の作品である *Physiologie du Mariage* の中にすでに現われている。

L'étude des mystères de la pensée, la découverte des organes de l'ÂME humaine, la géométrie de ses forces, les phénomènes de sa puissance, l'appréciation de la faculté qu'elle nous semble posséder de se mouvoir indépendamment du corps, de se transporter où elle veut et de voir sans le secours des organes corporels, enfin les lois de sa dynamique et celle de son influence physique, constitueront la glorieuse part du siècle suivant dans le trésor des sciences humaines.<sup>4)</sup>

科学によって、人間の思考の巧妙な機構を観察し、精神組織には肉体組織に劣らず、物理的な力が潜在していることを実証しようというバルザックの「意志論」は、*Théorie de la Démarche, La Peau de Chagrin* の中でも見出されるが、*Louis Lambert* において完成される。主人公のルイ・ランベールは、バルザックの寄宿学校時代の自伝的要素を多分に備えており、また、彼の哲学的思想の代弁者でもある。バルザックの分身とも言えるランベールは、「意志論」の研究に専念し、「意志の化学者」を目ざした。「意志論」の考えは、『人間喜劇』のほとんどの作品の随所に見え隠れしており、『人間喜劇』全体が «une gigantesque théorie (et pratique) de la Volonté<sup>5)</sup>» と化している。

この論文では、まず、*Louis Lambert* にみられる「意志論」の形成過程を辿り、「意志論」の意味するものを見極め、次に、先に引用した *Physiologie du Mariage* の文章にもあるような、「意志」の物理的作用、すなわち、意志の力学的法則を解明していこうと思う。

## 第 一 章

### ルイ・ランベールの「意志論」

バルザックは、唯心論と唯物論を相対立するものではなく、補完しあうものと考え、ルイ・ランベールの「意志論」は、両者の統合という形で提示されている。しかし、まず、ランベールの思考過程を順をおって見ていくことにしよう。

ルイ・ランベールは、最初は唯心論の立場にたっていた。唯心論者で影響を与えたのはサン・マルタン、ヤコブ・ベーム、スウェーデンボリ等の神秘主義者たちであるが、特にスウェーデンボリの影響が大きい。スウェーデンボリの著わした『天

界と地獄』は、霊界を訪れた作者と、天使との会話からなっているが、彼からランベールが引き出した考えは、人間の二重の本性である。

人間はすべて、自己の内に、「内的存在」(l'être intérieur)と「外的存在」(l'être extérieur)という二つの性質を合わせ持っている。「外的存在」は、五感でとらえることができ、科学的に証明できる肉体的なもの。「内的存在」とは逆に、不可視で、科学では証明できず、我々の目には超自然的な力として映る、精神的な存在である。天使は「内的存在」が「外的存在」に打ち勝った存在で、人が自分に宿っている天使の気高い性質を育てていくなれば、霊魂は物質に打ち勝って、そこから離れようとする。両者の分離が死であるが、天使は肉体から離脱して生き残り、真の生活を始める。逆に、肉体の活動に優位を占めさせると、物質化のために天使は死んでしまう。人間を区別する千差万別の個性は、この二重の本性の存在によって説明される。すなわち、「内的存在」の完成の度合が、天才の士と愚鈍な者とを距てるのである。

この考えから発展して、ランベールは後に、人間世界における三つの段階を想定している。本能だけに生きる本能圏 (la sphère de l'Instinct), 法律, 芸術, 利害関係, 社会思想が生じ, 善悪, 美德等の抽象概念によって判断する世界である抽象圏 (la sphère des Abstractions), 物質界ならびに精神界の事物を, その起源の根幹や結果の末梢にわたって見ることのできる特殊圏 (la sphère de la Spécialité)。そこから三つの種類の人間が現われる。

Instinctif, il est au-dessous de la mesure, Abstractif, il est au niveau; Spécialiste, il est au-dessus. Le Spécialisme ouvre à l'homme sa véritable carrière, l'infini commence à poindre en lui, là il entrevoit sa destinée.<sup>6)</sup>

≪ Spécialiste ≫ は、「目に見える世界を上位の諸世界につなぎ合わせる輪」であり、神の世界を予感するものである。

*L'Avant-Propos de la Comédie humaine* の中に、次のようなバルザックの言葉がある。

Je crois aux progrès de l'homme sur lui-même. Ceux qui veulent apercevoir chez moi l'intention de considérer l'homme comme une créature finie se trompent donc étrangement<sup>7)</sup>.

これは、人間は万物の霊長として最高の存在ではなく、万物の生成の一過程にすぎず、より高い段階が存在していることを意味している。

人間は、禁欲、祈りによって、肉体的な束縛を断ち切り、見神にまで到ることができる。従って、本能圏、抽象圏、天使一神の世界は、それぞれ互いに断続しているのではなく、人間の努力次第で上昇できる、いわば連続した世界と言える。それ故に、新しい福音書には「*Et Verbum caro factum est.*」の逆の意味が書かれているだろう。<sup>8)</sup>「*Et la chair se fera le Verbe, elle deviendra LA PAROLE DE DIEU*」と。

ランベールの思想に決定的な力をもたらし、「内的存在」を彼に確認せしめたのは、彼の夢であった。それは、夢の中で、翌日初めて訪れることになっていた風景のあらゆる細部を予め見ていたという、既視体験とでも言えるものであった。彼は、その体験から演繹して、「内的存在」は夢の中で、肉体から完全に分離し、空間を越えることができると考えた。

Si le paysage n'est pas venu vers moi, ce qui serait absurde à penser, j'y suis donc venu. Si j'étais ici pendant que je dormais dans mon alcôve, ce fait ne constitue-t-il pas une séparation complète entre mon corps et mon être intérieur?<sup>9)</sup>

夢は、バルザックにとって「内的存在」が発現する場であった。*Les Proscrits*, *Séraphîta*, *Ursule Mirouët*, *Sur Catherine de Médicis* 等多数の作品の中で、夢は、「内的存在」が肉体の束縛から解放され、「霊」と交渉を持つ場として描かれている。シャルル・ノディエにあてた手紙で、バルザックは、夢は時間、空間の廃絶した世界を垣間見せると語っている。

Le sommeil, autre gouffre où nous pouvons nous plonger (...) montre souvent à un homme de bonne foi l'espace complètement anéanti dans sa double force de temps et d'espace proprement dit...<sup>10)</sup>

ランベールは、夢のもたらす現象を鑑みて、精神的自然も物質的自然と同様に固有の法則を有し、精神は物質の世界に入りこむことが可能であるとした。

Le mouvement ne se conçoit point sans l'espace, le son n'agit que dans les angles ou sur les surfaces, et la coloration ne s'accomplit que par la lumière. Si, pendant la nuit, les yeux fermés, j'ai vu en moi-même des objets colorés, si j'ai entendu des bruits dans le plus absolu silence, et sans les conditions exigées pour que le son se forme, si dans la parfaite immobilité, j'ai franchi des espaces, nous aurions des facultés internes, indépendantes des lois physiques extérieures. La nature matérielle serait pénétrable par l'esprit.<sup>11)</sup>

このような洞察のもとに、ランベールは「意志論」をあみだす。

ランベールは、彼の体系の土台を言い表わすのに、自分の思想に適した、若干のありふれた言葉を選び出し、その言葉の意味を拡大し、新しい定義を賦与している。

「意志」(la Volonté)とは、人間のすべての行為の元になる力の総称である。

Le mot de VOLONTÉ serait à nommer le *milieu* où la *pensée* fait ses évolutions; ou dans une expression moins abstraite, la masse de force par laquelle l'homme peut reproduire, en dehors de lui-même les actions qui composent sa vie extérieure.<sup>12)</sup>

「思考」(la Pensée)は「意志」の本質的産物である。*Les Martyrs ignorés*の中で、バルザックはさらに「思考」を次のように定義づけている。

Savez-vous ce que j'entends par pensée? Les passions, les vices, les occupations extrêmes, les douleurs, les plaisirs sont des torrents de pensée.<sup>13)</sup>

要するに「思考」とは、思想、感情、情念などすべての心理現象を指している。

「意志」は*Jésus-Christ en Flandre*の中で、« la seule chose qui, dans l'homme, ressemble à ce que les savants nomment une âme<sup>14)</sup> »とバルザックが呼んでいるように、魂(âme)であり、精神エネルギーと言い換えられるものである。

また、「意欲」(la Volition)は、人間が「意志」を用いる行為を表わしている。「観念」(l'Idée)は頭脳の作り出す、すべてのものを表わす名で、人間が「思考」を

使う行為を構成している。「思考」は「意志」の産物であるが、同時に「観念」を生み出す場でもある。「意欲」や「意志」は、外部生活の行為を構成し、「思考」や「観念」は我々の内部機構の運動である。

バルザックは、このように、「意志」、「思考」、「意欲」、「観念」と四つの概念に分けているが、「意欲」という言葉は他の作品では見られず、また、「観念」と「思考」はあまり明確に区別されておらず、彼は両者を混同してほとんど同義的に扱っている。従って、ここで重要なのは、「思考」と「意志」の定義ならびに関係である。繰り返して言えば、「思考」は、あらゆる心的現象を表わし、「意志」はそれを生み出す根源的な存在である。「意志」は「思考」に先立つもので、*« Pour penser, il faut vouloir. »*<sup>15)</sup> ▶

ランベールは幼い頃、母親が髪をくしけずる際、電気の火花が飛び散るのを見たが、その幼児体験は感受性豊かな彼の想像力をかきたて、幾つかの仮説をたてるきっかけとなった。観念や意欲が飛び出す特殊な流動体に、電気を構成する原理が見られはしないか。意志の流動的な現象は、ヴォルタ電池が死人の神経組織にひきおこす流動体の現象と類似のものではなかろうか。観念の形成や発散は、じゃ香の粒のような微粒子に比べられるものではなかろうか。要するに、心理現象と物理現象との相関関係が見られはしないか。

ランベールは次第に、「内的存在」は実体であるが、ただ人間の不完全な感覚では把握できないために、また、人間にとって不可解であるが故に、人間はそれを神様扱いしたり、神秘的な世界を打ちたてたりしたのだと考えるようになった。彼にとって、幻視や奇跡、あらゆる超自然的な現象は、「内的存在」の力の証明であり、物質の構成原理と思考のそれとの間の、ある種の親和力の結果であった。

最初は紛れもない唯心論者であったランベールは、いつの間にか思考の物質性を認めるようになっていた。科学的というよりむしろ、詩的で想像力を駆使して作り上げたランベールの理論は、神秘的であると同時に科学的なメスメル（Mesmer）の「動物磁気説」(*le magnétisme animal*)を援用するようになる。

メスメルは、万物は、体内を循環している磁気的な液体からなるとする万有液体説を唱え、この磁液の均衡が破られた時、器官に変化がおき、様々な病氣や障害を生み出すとした。彼は、術者の体から放出された磁液が、やがて、患者の体内を流れ、それによって、患者の磁液の調和を取り戻し、病氣を直すと考えた。

メスメルの学説は、バルザックにとって、「意志」は実在する活力であり、物理的な力となりうることを実証するものであった。彼は *Ursule Mirouët* の中でメス

メルを次のように評価している。

Mesmer, qui reconnaissait en l'homme l'existence d'une influence pénétrante, dominatrice d'homme à homme, mais en œuvre par la volonté, curative par l'abondance du fluide, et dont le jeu constitue un duel entre deux volontés, entre un mal à guérir et le vouloir de guérir.<sup>16)</sup>

バルザックにとって、イエス・キリストや使徒達の行なった、病人を療し、死人を蘇えらせた奇跡は、《magnétisme》によるものであった。彼は、《magnétisme》を《la science des fluides impondérables<sup>17)</sup>》と呼び、《magnétisme》が心的な力を流体とみなしていることに、大きな関心と賛意を寄せている。

メスメルの、バルザックに対する影響は様々な点でみられ、Moïse le Yaouanc はバルザックの宇宙論自体が、《magnétisme》に負うところが大きいと指摘している<sup>18)</sup>。その最も大きな影響だけに限って言えば、意志を生命流体、《fluide intangible, invisible, impondérable<sup>19)</sup>》とバルザックがみなしていることである。

意志の流動性については、後でもう一度言及するので、ここではメスメルの影響によるものであることだけを指摘し、ランベールの「意志論」に戻ることにしよう。

ランベールは、意志は「生ける力」(forces vives)であるという原理にたって、意志の自律性や、その運動の特性を認めた。

(...) la Volonté pouvait, par un mouvement tout contractile de l'être intérieur, s'ammasser; puis, par un autre mouvement, être projetée au dehors, et même être confiée à des objets matériels. Ainsi la force entière d'un homme devait avoir la propriété de réagir sur les autres, et de les pénétrer d'une essence étrangère à la leur.<sup>20)</sup>

彼にとって、意志や思考は、いわば、目に見えるもの、手で触ることのできるものだった。それは、物質界の生物と同様に、生まれ、年とともに老いたり、萎縮したり、勢いを盛り返したりする、一つの生命、一つの力、実体であった。従って、思考は「夥しい子や孫を後ろに引き連れた全く物理的な力<sup>21)</sup>。として現われ、それは、《une nouvelle Humanité sous une autre forme<sup>22)</sup>》であった。



以上述べてきたように、ランペール＝バルザックの「意志論」は、精神と物質の二元論から出発して、精神が物質をも包括する一元論に到っている。彼にとって、万物は一つの実体に還元される。

バルザックが、一元的な体系を生み出す根拠となったのは、Geoffroi Saint-Hilaire の《l'unité de composition》の理論である。Geoffroi Saint-Hilaire は、神は次々に様々な種を創造したという伝統的な教理に反して、あらゆる被創造物は、唯一の組成原理から発達したものであると考えた。当時の有名な学者である Cuvier との論争は、センセーションを巻き起こしたが、バルザックは、Geoffroi Saint-Hilaire を全面的に支持した<sup>23)</sup>。

バルザックは、Geoffroi Saint-Hilaire の理論にならい、植物・動物の種類の多様は、環境の差異によって生じたのであり、本質は同じで、構成においては、単一の原理に帰すると考えた。

(...) le principe vital est le même par toute l'organisation; le développement d'une plante, d'une pierre, d'un homme, d'un animal ont la même marche, le même but, la mort, etc.<sup>24)</sup>

Rien ne s'oppose à ce que nous croyions que toutes les substances possibles ne soient des modifications d'une même substance.<sup>25)</sup>

唯物論者である Geoffroi Saint-Hilaire は鉱物－植物－動物－人間という進化の段階で終止符をうつが、バルザックの《l'unité de composition》は、スウェーデンボリの神秘主義の立場にたって、人間から天使に到る進化の場を付加する。従って、次のようなことが言える。

(...) la Parole divine nourrissait la Parole spirituelle, la Parole spirituelle nourrissait la Parole animée, la Parole animale nourrissait la Parole végétale, et la Parole végétale exprimait la vie de la Parole stérile.<sup>26)</sup>

バルザックは、精神的宇宙と、物理的宇宙は、同じ唯一の実体に還元されるとみなし、地上界と天界との照応（コレスポンダンス）を認めた。

L'ACTION se produit dans le ciel, de là dans le monde, et par degrés dans les infiniment petits de la terre; les effets terrestres étant liés à leurs causes célestes, font que tout y est CORRESPONDANT et SIGNIFIANT.<sup>27)</sup>

神そのものの存在は、宇宙の「中心より末端に、末端より中心に、浩洋たる大河のごとく漫々として流れゆくもの<sup>28)</sup>」であり、各々の被創造物は「あるいは植物の樹液として、あるいは人間の血液として、あるいは天体の運行として、この法則の正確なる縮図<sup>29)</sup>」を表わしていた。

地上におけるこの実体を、バルザックは「エーテル性実体」(Substance Éthérée)と名づけた。「エーテル性実体」は、光、熱、電気等、重さを測ることのできない流動体と本質を同じくするものであり、物質の根源をなしている。

Ici-bas, tout est le produit d'une SUBSTANCE ÉTHÉRÉE, base commune de plusieurs phénomènes connus sous les noms impropres d'Électricité, Chaleur, Lumière, Fluide galvanique, magnétique, etc. L'universalité des transmutations de cette Substance constitue ce que l'on appelle vulgairement La Matière.<sup>30)</sup>

「エーテル性実体」は、脳の中で意志に変形される。

Le Cerveau est le matras où l'ANIMAL transporte ce que, suivant la force de cet appareil, chacune de ses organisations peut absorber de cette SUBSTANCE, et d'où elle sort transformée en Volonté.<sup>31)</sup>

意志は、「エーテル性実体」が人間の体内に吸収され、変形されたもので、「およそ運動を賦与されている存在につきものの流体<sup>32)</sup>」として、血液のように体内を循環している。

Une idée est donc le produit du fluide nerveux qui constitue une circulation intime, semblable à la circulation sanguine.<sup>33)</sup>

すべての被創造物は、意志を有しているが、意志の強度において、人間が優っている。

En l'homme, la Volonté devient une force qui lui est propre, et qui surpasse en intensité celle de toutes les espèces.<sup>34)</sup>

また、人間の中でも、それぞれの能力に応じて「エーテル性実体」の吸収量の多寡が生じる。同時に、意志の量は、血液と同様に、個々人において限られている。

L'homme a une somme donnée d'énergie.<sup>35)</sup> Tel homme ou telle femme est à tel autre, comme dix est à trente, comme un est à cinq; et il est un degré que chacun de nous ne dépasse pas.<sup>36)</sup>

意志は、心的現象であると同時に、電気に似た、しかしそれよりも微細な生命流体として体内を循環しており、直接、有機体としての人間に働きかける。このように、目に見えない精神的なものを物理的にとらえ、一つの実体として説明づけたのが、ランベール＝バルザックの「意志論」であった。

## 第 二 章

### 意志の力学的法則

次に、意志が、物理的にどのように働くか、その力学を見ていくことにしよう。

意志はまず、少しも消費されずにいる生命エネルギーとして現われる。「意志は純粋なまま、感情は潜在力をとどめたままの<sup>37)</sup>」無垢な状態。この時、人間の内には無限の可能性が秘められ、生の躍動感が湧きおこる。

Je sens en moi comme une force qui veut s'exercer, je lutte contre quelque chose.<sup>38)</sup>

Les jeunes gens ont presque tous un compas avec lequel ils se plaisent à mesurer l'avenir; quand leur volonté s'accorde avec la hardiesse de l'angle qu'ils ouvrent, le monde est à eux.<sup>39)</sup>

意志の静止状態が、バルザック的存在の出発点であり、意志は静から動へと移行すべき、精神の糧を求めて、激しい餓えをおぼえる。

C'est moi qui contiens dans mon sein cette faim, cette soif, cette ardeur de l'enfer.<sup>40)</sup>

次に、意志は欲望や情熱や知的作業に、または肉体的労働と化す。心理的であれ、身体的であれ、何か活動するには、体内を循環している意志の流れを、活動の起点である一点に集中しなければならない。

「意志は、内的存在の収縮一方の運動でひとところに積み重なる。<sup>41)</sup>」この運動の力が大きければ大きいほど、集中度は増し、活動するエネルギーの量も莫大になっていく。

Toutes les fois que la pensée demeure dans sa totalité, reste bloc, ne se débite pas (...), elle est apte à jeter des feux d'une intensité prodigieuse.<sup>42)</sup>

例えば、純潔な人々は、精力が節約される結果、頭脳はエネルギーの宝庫となる。従って、彼らが「肉体なり精神なりを必要とする時、行為や思索の力を借りようとする時、彼らは初めておのれの筋肉に鋼鉄を見出し、おのれの悟性に天与の知恵を見出す。その時初めて悪魔的な力、というか意志の魔法を見出すのである。<sup>43)</sup>」

一点に集中した意志は、「純粹な創造的エネルギーの運動に凝縮<sup>44)</sup>」する。凝縮されたエネルギーは、別の運動によって体外へ放射される。意志は、時には手や髪、まなざしに宿って威光を発し、表皮を貫いて、表に滲出する。

(...) une émission de force par le plexus solaire et par les mains, deux organes que je nommerais volontiers les seconds cerveaux de l'homme, tant ils sont intellectuellement sensibles et fluidement agissants.<sup>45)</sup>

(...) ses yeux dardait la pensée, elle passait par tous les organes qui la projettent.<sup>46)</sup>

(...) chevelure qui se décolore, s'éclaircit, tombe et disparaît selon les

divers degrés de déperdition ou de cristallisation des pensées.<sup>47)</sup>

放射された意志は、さらに、周囲の環境を変化させたり、周りの人間に影響を与え、「もともと、その人たちとは縁のない精髓を彼らにしみこませる<sup>48)</sup>」ことができる。例えば、怒りの感情。

La colère, comme toutes nos expressions passionnées, est un courant de la force humaine qui agit électriquement; sa commotion, quand il se dégage, agit sur les personnes présentes, même sans qu'elles en soient le but ou la cause. Ne se rencontre-t-il pas des hommes qui, par une décharge de leur volition, cohobent les sentiments des masses?<sup>49)</sup>

意志は集中化によって、磁氣的な力を帯び、相手の魂と体を揺さぶり、魂の感応を引き起こす。この、意志の伝達作用によって、*Albert Savarus*の主人公は、愛する女性を自分に引きつけ、魂の衝撃を与えることができた。

Rodolphe appuyé contre le chambranle de la porte, regarda la princesse en dardant sur elle ce regard fixe, persistant, attractif et chargé de toute la volonté humaine concentrée dans ce sentiment appelé désir, mais qui prend alors le caractère d'un violent commandement. La flamme de ce regard atteignait-elle Francesca? Francesca s'attendait-elle de moment à voir Rodolphe? Au bout de quelques minutes, elle cloua un regard vers la porte comme attirée par ce courant d'amour, et ses yeux, sans hésiter, se plongèrent dans les yeux de Rodolphe. Une léger frémissement agita ce magnifique visage et ce beau corps; la secousse de l'âme réagissait!<sup>50)</sup>

意志＝生命エネルギーの一点への集中から放射に到る過程で、どんな人物でも恐るべき肉体的能力を発揮したり、バルザックが「第二の眼」(*Seconde Vue*)と呼んでいる、千里眼的な力を持つことができる。

虚弱なランベールが、十人の生徒を相手に力で負けなかったのは、「並はずれた能力を招きよせたり、自分の力を一点に集めて注ぎこむ天賦の才<sup>51)</sup>」のおかげであった。また、*Splendeurs et Misères des Courtisanes*の中で、セリジー伯爵夫人が、

鍛鉄の棒を華奢な手で折ることができたのも、愛人の死に対する激しい絶望の圧迫を受けて、その生命エネルギーの総力を、手首に送りこんだためである。

(...) sous l'empire de la pression, qui est la volonté ramassée sur un point et arrivée à des quantités de force animale incalculables, comme le sont toute les différentes espèces de puissances électriques, l'homme peut apporter sa vitalité tout entière, soit pour l'attaque, soit pour la résistance, dans tel ou tel de ses organes...<sup>52)</sup>

一つの器官は、意志の集中によって、特別な力を授けられ、その機能が拡大される。バルザックは、声の抑揚を聞き分けるだけで、人の性格を判断した盲人、女性の匂いを嗅げば、若い娘か、成熟した女性か、子供を産んだ女性か不妊の女性かを識別できた僧侶の例を引き合いに出し、嗅覚や聴覚等、感覚の鋭さが精神の鋭さに相応し、一つの特長能力となることを示している<sup>53)</sup>。

ところで、五感のうち、特にバルザックが重視しているのは、視覚、すなわち見ること (voir) であった。

La Volonté s'exerce par des organes vulgairement nommés les cinq sens, qui n'en sont qu'un seul, la faculté de voir. Le tact comme le goût, l'ouïe comme l'odorat, est une vue adaptée aux transformations de la SUBSTANCE que l'homme peut saisir dans ses deux états, transformée et non transformée.<sup>54)</sup>

視覚はもはや、単に外面的な姿、形を見るというのではなく、内面に潜む本質を洞察することに関わってくる。

「観察家というのは、異論の余地なく第一級の天才である<sup>55)</sup>」と彼は言う。バルザック自身、優れた観察力の持ち主で、*Facino Cane* において、直観的な観察によって他人の心の深層を洞察し、他人の生を生きることができると自負している。

Chez moi l'observation était déjà devenue intuitive, elle pénétrait l'âme sans négliger le corps; ou plutôt elle saisissait si bien les détails extérieurs; qu'elle allait sur-le-champ au delà; elle me donnait la faculté de vivre de

la vie de l'individu sur laquelle elle s'exerçait, en me permettant de me substituer à lui comme le derviche des Mille et une Nuits prenait le corps et l'âme des personnes sur lesquelles il prononçait certaines paroles. (...) Quitter ses habitudes, devenir un autre que soi par l'ivresse des facultés morales, et jouer ce jeu à volonté, telle était ma distraction.<sup>56)</sup>

この直観的な観察力を、彼は「第二の眼」(Seconde Vue)と呼んでいる。「第二の眼」を備えた人間は、ルイ・ランベールが人類を区分した三つの世界(本能圏、抽象圏、特殊圏)の中で、最も高い位置にある特殊圏に属する。《Spécialité》の定義自体が、見ることに終始している。

La Spécialité consiste à voir les choses du monde matériel aussi bien que celle du monde spirituel dans leur ramifications originelles et conséquentielles. Les plus beaux génies humaines sont ceux qui sont partis des ténèbres de l'Abstraction pour arriver aux lumières de la Spécialité. (Spécialité, *species*, vue, spéculer, voir tout et d'un seul coup; *speculum*, miroir ou moyen d'apprécier une chose en la voyant tout entière.) Jésus était Spécialiste, il voyait le fait dans ses racines et dans ses productions, dans le passé qui l'avait engendré, dans le présent où il se manifestait, dans l'avenir où il se développait; sa vue pénétrait l'entendement d'autrui. La perfection de la vue intérieure enfante le don de Spécialité. La Spécialité emporte l'intuition. L'intuition est une des facultés de L'HOMME INTERIEUR dont le Spécialisme est un attribut.<sup>57)</sup>

「内的視力」を発揮する人間は、「運動を自由に操り、遍在性によって一切に結びつけられている<sup>58)</sup>」天使＝神の力を授かるのであり、物理的空間、時間を飛び越え、無限の世界に遊ぶ。

L'homme possède l'exorbitante faculté d'anéantir, par rapport à lui, l'espace qui n'existe que par rapport à lui; de s'isoler complètement du milieu dans lequel il réside, et de franchir en vertu d'une puissance locomotive presque infinie, les énormes distances de la nature physique.<sup>59)</sup>

Je lis dans les cœurs, je vois l'avenir, je sais le passé. Je suis ici et je puis être ailleurs! Je ne dépends ni du temps ni de l'espace, ni de la distance. Le monde est mon serviteur.<sup>60)</sup>

意志の集中によって、人は時間、空間を超越しているが故に、一個の事物、一つの現象の原因と結果を、過去と未来を、瞬時に把握する力を持つ。従って、それは未来を予言する能力を生み出す。*La Recherche de l'Absolu* の中の、娘が父の自殺の企てを予知する場面は、その過程が如実に語られている。

Quand il eut disparu, Marguerite resta dans une stupeur qui eut pour effet de l'isoler de la terre, elle n'était plus dans le parloir, elle ne sentait plus son corps, elle avait des ailes, et volait dans les espaces du monde moral où tout est immense, où la pensée rapproche et les distances et les temps, où quelque main divine relève la toile étendue sur l'avenir. Il lui sembla qu'il s'écoulait des jours entiers entre chacun des pas que faisait son père en montant l'escalier; puis elle eut un frisson d'horreur au moment où elle l'entendit entrer dans sa chambre. Guidée par un pressentiment qui répandit dans son âme la poignante clarté d'un éclair, elle franchit les escaliers, sans lumière, sans bruit, avec la vélocité d'une flèche, et vit son père qui s'ajustait le front avec un pistolet.<sup>61)</sup>

内的視覚は、創造物を拡大し、高揚させ、精神の高みに飛翔させる。

Je volais, emporté par mon guide, entraîné, par une puissance semblable à celle qui pendant nos rêves nous ravit dans les sphères invisibles aux yeux du corps<sup>67)</sup>

「人間だけが、特別の器官に備わる垂直性の感覚を持っている<sup>63)</sup>」と *Séraphita* の中でバルザックは書いた。人間は、意志の力によって、肉体の重さを捨て、身軽になって、上へ上へと昇っていく。ちょうど、*Séraphita* の冒頭でセラフィトゥスとミンナが、二本の矢のように、ファルベルク山の頂上に向かって上昇していくように、意志の集中は常に、精神の上昇運動を目ざす。



Vole encore à travers les sphères brillantes et lumineuses, admire, cours. En volant ainsi, tu te reposes, tu marche sans fatigue. Comme tous les hommes, tu voudrais être toujours ainsi plongé dans ces sphères de parfums, de lumière où tu vas, léger de tout ton corps évanoui, où tu parles par la pensée! Cours, vole, jouis un moment des ailes que tu conquerras, quand l'amour sera si complet en toi que tu n'auras plus de sens, que tu seras tout intelligence et tout amour!<sup>64)</sup>

人は、一つの世界から他の世界へ、幻影から幻影へと飛翔し、あらゆる物の根元であり、すべての中心である神の光に達しようと努める。上昇につれて、その顔は光輝き、その額は晴れやかになる。「内的存在」が生み出す効果によって、発瀾とした生命の発条が見られる。この時、人間の内部から強烈な光が発せられる。セラフィトゥスが山頂をのぼりつめ、下界を見下ろす時、彼の「金色の眼差から奔る火は、明らかに太陽光線に匹敵していたし、太陽から光を受けるのではなく、太陽に光を与えているようにみえた。<sup>65)</sup>

意志の垂直の力動性に身を委ね、「過去の境界のない深淵の上を飛翔する<sup>66)</sup>」ことは、人を恍惚とさせ、測り知れない快樂をもたらす。さらに、この時、人間は、宇宙をその脳中に呼びよせる力を持つ。

Les hommes ont-ils le pouvoir de faire venir l'univers dans leur cerveau, ou leur cerveau est-il un talisman avec lequel ils abolissent les lois du temps et de l'espace? . . . La science hésitera longtemps à choisir entre ces deux mystères également inexplicables. Toujours est-il constant que l'inspiration déroule au poète des transfigurations sans nombre et semblables aux magiques fantasmagories de nos rêves.<sup>67)</sup>

自我のうちに宇宙を顕現させ、時の絆に縛られず、空間の桎梏にとらわれずして飛翔することに、人は誰でも陶醉を覚える。

従って、至福の状態は、人間の作り出したあらゆる富や力、事物によってではなく、人間の内部の、意志による宇宙の電撃的な所有によってもたらされる。

Ces fêtes splendides de lumière, enceinte de musique où la parole de l'Homme essaie à tonner; tous ces triomphes de sa main, une pensée, un sentiment les écrase. L'Esprit peut rassembler autour de l'homme et dans l'homme de plus vives lumières, lui faire entendre de plus mélodieuses harmonies, asseoir sur les nuées de brillantes constalations qu'il interroge. (・・・) Les plus réelles magnificences ne sont pas dans les choses, elles sont en nous-mêmes.<sup>68)</sup>

ところで、一つの器官への意志の集中は、他の器官を蔑ろにするものであり、集中が長く続く場合、他の器官の機能を妨げる結果となる。

ボクサーは拳の打撃のうちに意志の力を費し、踊り手は自分の脚に、大理石工は腕の運動に生命エネルギーを預けてしまったために、知能が遅れをとるようになった。また逆に、意志を脳髄に集中すると、「脳髄は力に満ち溢れ、虚弱な脳膜もたくましく広がり、髄質も発達してくるだろう。その代わり、頭脳から下はすっかりお留守になってしまうので、天才でも必ず病気になってしまう。<sup>69)</sup>

従って、ある特定器官への意志の集中は、その器官を肥大させ、他の器官を萎縮させてしまう。この結果、身体的特徴そのものが変わることがある。昔は均衡のとれた体つきだったバルタザル・クラスは、長年の思索生活のために、頭が異常に大きく、上半身に比べて下半身は華奢で、ひ弱な、アンバランスな体格に変貌している。(ルイ・ランベールや他の思索型の人物が皆、頭が大きく、下半身が貧弱なのはこのためである。) また、職業上いつも同一運動の反復を強いられている人々は、歩き方にひどく偏った動きが見られると *Théorie de la Démarche* でバルザックは述べている。いつも決まった方向に生命エネルギーが流れるため、動きが妙に偏り、独特の身体つきが生まれてくるわけだ。

たえず刺激され、栄養を送られて異常なまでに膨れあがった器官は、やがて衰弱し、機能が衰える運命にある。意志の急激な凝縮によって恐ろしい毒が調合され、多くの人間が、体内ににわかに充満した「心的酸性の激発」(le foudroiment de quelque acide moral<sup>70)</sup>)によって身を滅すことになる。

その上、一人一人の人間の持っている意志の量が限られているため、大量に生命エネルギーを放出した後には、驚くべき生命流体の消耗が待っており、内的生命の激しい衰えがみられる。

Ce combat avec les hommes et les choses, où j'ai sans cesse versé ma force et mon énergie, où j'ai tant usé les ressorts du désir, m'a miné, pour ainsi dire, intérieurement. Avec les apparences de la force, de la santé, je me sens ruiné. Chaque jour emporte un lambeau de ma vie intime.<sup>71)</sup>

大動脈を断ち切れば、血液が多量に流出して死が訪れるように、意志を一点に集中し、大量に放出すれば、一人の健康な人間を、一瞬のうちに屍にしてしまう。

(…) la pensée était un fluide de la nature des impondérables, qui a en nous son système circulatoire, ses veines et ses artères; par son affluence sur un seul point, il agit comme une bouteille de Leyde, et peut donner la mort; un homme peut le tarir dans sa source par un mouvement moral qui dépense tout, comme on peut tarir celle du sang en s'ouvrant l'artère cruciale.<sup>72)</sup>

激しい情動や、傷つけられたり、満足をえられない情念は、最も危険な凶器となって身体を破壊する。

Une arme est tout ce qui peut servir à blesser, et à ce titre, les sentiments sont peut-être les armes les plus cruelles que l'homme puisse employer pour frapper son semblable.<sup>73)</sup>

知的活動、芸術的創造もまた、意志の濫費である。

Le génie n'est-il pas un constant excès qui dévore le temps, l'argent, le corps et qui mène à l'hôpital plus rapidement encore que les passions mauvaises?<sup>74)</sup>

思考の破壊的な力の犠牲となった者は『人間喜劇』の中には数多く見られる。ルイ・ランペールもその一人である。

Louis Lambert, ce centenaire de vingt-cinq ans, déjà vieux de pensées,

usé par des siècles de réflexions, perdu par la jouissance morale de tous les plaisirs humains perçus sans que le corps en fût complice, autrement que pour être ruiné par l'abus de la pensée.<sup>75)</sup>

バルザックはしばしば、「思考する人間は墮落した動物である」《L'homme qui pense est un animal dépravé》という警句を吐いている。これは、人間が思考し、文明化すればするほど、異常な刺激や興奮の中に身を投げることになり、その結果、命を縮めることになるという意味である。

D'immenses obstacles environnent les grands plaisirs de l'homme, non ses jouissances de détail, mais les systèmes qui érigent en habitude ses sensations les plus rares, les résument, les lui fertilisent en lui créant une vie dramatique dans sa vie, en nécessitant une exorbitance, une prompte dissipation de ses forces.<sup>76)</sup>

人間の思考は、まず、純粹に動物的本能の単純な運動から始まり、次に思念の凝集・比較や反省、瞑想に進み、最後に忘我の三昧境に到達する。しかしながら、深い瞑想や美しい恍惚状態は、目を一点に据えたまま、何時間も身動きしない強硬症(catalepsie)に導く。「内的能力発揮の絶頂においては、肉体生活の完全な停止に到達<sup>77)</sup>」する。それ故、あらゆる創造的な芸術活動も、その過剰は意志の放蕩であり、肉体の放蕩と同じ結果をもたらす。意志の集中度において、知的活動の方が優っているだけに、身体に及ぼす悪影響は大きい。

(...) la pensée est plus puissante que ne l'est le corps, elle le mange, l'absorbe et le détruit; la pensée est le plus violent de tous les agents de destruction, elle est le véritable ange exterminateur de l'humanité qu'elle tue et vivifie, car elle vivifie et tue.<sup>78)</sup>

「生命は燃焼を伴う<sup>79)</sup>」と、バルタザル・クラースは言う。炉の活動の強弱に応じて、生命は長くも続かし、短くおわりもする。鉱物において、燃焼は潜在的であるか、ほとんど感じられないために、その破壊は無限に引き延ばされる。植物は、湿気と呼ぶ化合によって、常にみずみずしくなるため、限りなく生命を保つことが

できる。しかし、自然が器官を完成させ、感性、本能、知能といった、有機体における顕著な三段階をそこに賦与する度に、これら三つの器官は、ある燃焼を要求する。その燃焼の活動性は結果と正比例する。従って、知能の最高点にある人間においては、最強度の燃焼がおこなわれる。

思考は、意志を燃やし、炎にする。感情の爆発はそのまま、燃えさかる炎となつて、肉体を照らし出す。

Elle brûlait! La fumée de l'incendie qui la ravageait semblait passer par ses rides comme par autant de crevasses labourées par une éruption volcanique.<sup>80)</sup>

*Les Martyrs ignorés* の作中人物は言う。

La vie est un feu qu'il faut couvrir des cendres. Penser, (…), c'est ajouter de la flamme au feu.<sup>81)</sup>

燃焼の強度において、鉱物と人間との間に差異が生じるように、人間の間においても、各人特有の組織によって蓄積される熱素 (le phlogistique) の多寡によって、強弱がある。*La Peau de Chagrin* の主人公のラファエル・ド・ヴァランタンは、熱素を過剰に含んでいた。作中で、ある医者 が彼に指摘する。

Chez vous, le phlogistique abonde; vous êtes, s'il m'est permis de m'expliquer ainsi, suroxygéné par la complexion ardente des hommes destinés aux grandes passions. En respirant vif et pur qui accélère la vie chez les hommes à fibre molle, vous aidez encore à une combustion déjà trop rapide.<sup>82)</sup>

逆に、百歳を越えた老人のほとんどは、思考が緩慢にしか働かない湿った脳 (le cerveau hydriaque<sup>83)</sup>) の持ち主であった。彼らは、機械的な仕事、質素な食事によって、生命の火にあまり油を注がなかった。

従って、思考しなければいけないほど、生命の燃焼を抑え、長寿を全うできる。例えば、フォントネルは、声を出せば必ず大量の生命流体が消失するので、決して会話をしなかった。生涯一度も泣かず、笑わず、走らなかった。生まれつき虚弱で長

生きできぬと宣告されたこの男は、余計な生命運動を慎むよう厳しい節制を守ったお陰で、齢百歳を超えることができた<sup>84)</sup>。守銭奴のゴブセックも、金銭の儉約だけに留まらず、フォントネル同様に、生命運動の儉約をはかった。彼は馬車でも通ると、無理に声を張り上げるのが嫌さに、話の途中でも話を切って黙った。朝起きてから晩に至るまで、起居動作の一切が、時計仕掛けのように規則正しかった。彼は、いわば、模型人間 (homme-modèle) みたいなものだった<sup>85)</sup>。

人間的な感情を一切棄てて、機械的な生活を送ること、これが、バルザックにとって長寿の秘訣であった。ラファエル・ド・ヴァランタンは、パリ社会という激しい思考の渦を逃れ、モン・ドール(Mont-Dore)の山の中に隠遁する。「この岩の牝蠣のひとつとなって、死を眠らせながら一日でもよけいに殻の寿命をのばす<sup>86)</sup>」ために。彼は何日も、岩の上に坐って、自然の繰り広げる茫漠たる風景をながめ、無為のうちに時を費した。そして、「この自然の本質的な動きに同化して、本能生活を支配する専制的で保守的な法則に服従しようと努めた。<sup>87)</sup>」その結果、遂に、自然と一体となることに成功した。

Il réussit à devenir partie intégrante de cette large et puissante fructification: il avait épousé les intempéries de l'air, habité tous les creux de rochers, appris les mœurs et les habitudes de toutes les plantes, étudié le régime des eaux, leurs gisements, et fait connaissance avec les animaux; enfin, il s'était si parfaitement uni à cette terre animée, qu'il en avait en quelque sorte saisi l'âme et pénétré les secrets.<sup>88)</sup>

自然の中にまどろみ、思考なき生の存続。それは、バルザックの世界では、激しい欲望による生の瞬間燃焼と対比されて現われる。

La vie simple et mécanique conduit à quelque sagesse insensée en étouffant notre intelligence par le travail; tandis que la vie passée dans le vide des abstractions ou dans les abîmes du monde moral mène à quelque folle sagesse. En un mot, tuer les sentiments pour vivre vieux, ou mourir jeune en acceptant le martyr des passions, voilà notre arrêt.<sup>89)</sup>

生の充実感、意志の集中による忘我の境地にある。肉体的にも知的にも、超人

的な力の発揮は、大量の生命エネルギーの燃焼によるものである。しかし、欲望が満たされるにつれて縮んでいく「あら皮」が象徴しているように、生の充実は死につながっている。過度の情熱によって、時間も空間も、一切が消滅する高揚した瞬間は、真の生へ限りなく近づくと同時に、生の持続の破壊でもある。バルザック自身、過剰な創作活動によって、生を消滅させ、死の恐怖に苛まれている。

Pardonnez-moi d'avoir jeté ce cri de douleurs, ne vous en alarmez pas trop. Mais je périssais, emporté par un excès de travail, il ne faudrait pas non plus que cela vous surprenne.<sup>90)</sup>

Je suis sans âme ni cœur, tout est mort. (・・・) Je mourrai épuisé, je mourrai de travail et d'anxiété, je le sens. (・・・) Ecoute: non seulement le cœur et l'âme sont attaqués; mais je te le dis bien bas, *je perds la mémoire de substantifs*, et je suis prodigieusement alarmé.<sup>91)</sup>

バルザックは、『『あら皮』の作者が若くして死ぬのを見るのはさぞかし面白いことだろう<sup>92)</sup>』とシニカルな口調で書いているが、彼はまさに、自分の思考を貧り食い、自らを滅していく運命に甘んじねばならない悲劇に直面している。それ故に、運動と知力の放棄の中に己れを埋没させ、命をできるだけ引き延ばそうという彼の切なる願いは、彼自身の人生の認識から生じていると言えよう。バルザックの作品中のある錬金術師が、作者にかかわって悲痛な叫びを発している。

Si vous prétendez que quelque chose nous survit, ce n'est pas nous, car tout ce qui est le moi actuel périt! Or, c'est le moi actuel que je veux continuer au delà du terme assigné à sa vie (・・・). Déjà nous avons étendu nos sens, nous voyons dans les astres! Nous devons pouvoir étendre notre vie!<sup>93)</sup>

バルザックの作品の主要な登場人物は、すべて「持続なき生か、それとも生なき持続か<sup>94)</sup>」のジレンマに陥っている。しかし、彼らは、ラファエルのように、最終的には一瞬の幸福を選ぶ。ラファエルは若くして死ぬ。バルタザール・クラスやフレンホーフェルは絶対へのあくなき希求によって、自らを破局に追い込む。彼ら

は一瞬の間、生の原理を捉えることができるが、次の一瞬、肉体の死または精神の死に見舞われ、後には空虚、無が残るのみである。

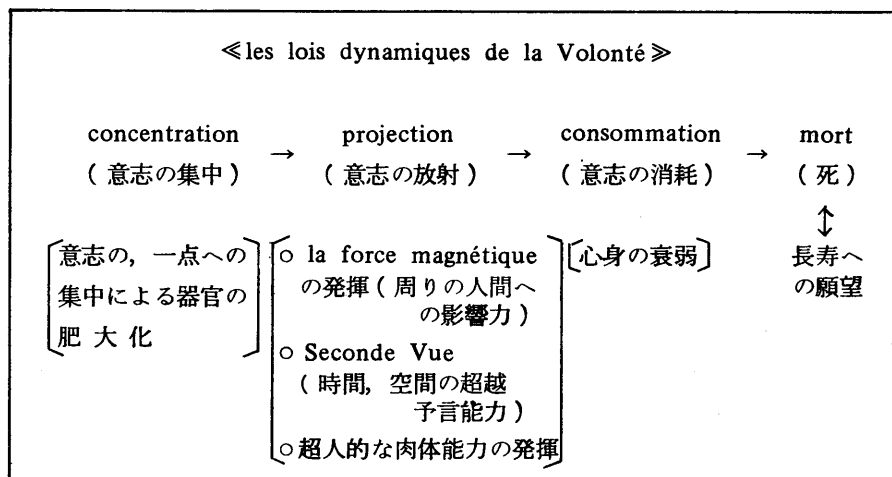
Cette énorme puissance, en un instant appréhendée, fut en un instant exercée, jugée, usée. Ce qui était tout, ne fut rien.<sup>95)</sup>

こうして「意志論」は死によって閉ざされる。

## 結 論

バルザックの「意志論」は、心的現象を物理的な力を持つものとして捉え、その《matérialité de la pensée》という考えは、*Comédie humaine* 全体の骨子をなしている。*Comédie humaine* のほとんどの登場人物は、情欲、金銭欲、権力欲のような卑俗な欲望であれ、または母性愛、父性愛、妻や夫に対する愛情、芸術や学問における高邁な知的探究であれ、何か一つの固定観念に憑かれ、破滅の道に到っているが、これらすべては、思考の物理的な破壊力によって説明づけられるのである。バルザックの創造世界の主人公たちは、意志の集中、放射によって、作者自身の豊饒な創造力に恵まれると同時に、作者の悲劇的な体験である、意志の消耗と、迫り来る破局に脅かされている。

第二章で、意志の力学的法則をみてきたが、簡単に図式化すると、次のようになる。





このように、万物の生成過程の一段階としての人間の存在は、死によって閉じられるわけだが、肉体の死が、より高次の段階につながることもある。第一章で触れた、バルザックの天使主義（「内的存在」が「外的存在」に打ち勝ち、肉体と完全に分離すれば、肉体の死後も天使となって生き続けることができるという考え）によって、多くの人間にとっては敗北である死は、ある特権的な人物にとっては勝利となる。

その例として、ルイ・ランベールとセラフィタが挙げられる。彼らは肉体的束縛を脱し、さらに高度の精神世界に達している。ランベールの狂気の状態を、バルザックは、魂の生活が肉体の生活を消滅させたものとみなしている。精神的視覚のすばらしい働きのために、ランベールの言葉が常人には支離滅裂に思われ、彼を狂人扱いするが、実は彼は、魂のすばらしい作用によって、肉体から抜けだすことに成功し、法悦の境地にあるのだ。バルザックは、*Théorie de la Démarche* でも、狂人について言及している。

Un fou est un homme qui voit un abîme et y tombe. Le savant l'entend tomber, prend sa toise, mesure la distance, fait un escalier, descend, remonte; et se frotte les mains après avoir dit à l'univers: « Cet abîme a dix-huit cent deux pieds de profondeur, la température du fond est de deux degrés plus chaude que celle de notre atmosphère. » Puis il vit en famille. Le fou reste dans sa loge. Ils meurent tous deux. Dieu seul sait qui du fou, qui du savant, a été le plus près du vrai.<sup>96)</sup>

« Il n'y a pas un seul de nos mouvements, ni une seule de nos actions qui ne soit un abîme. » と、バルザックは続けて言っているが、彼の言う「abîme」とは、自己の内部にある。そして、まさに自己の内部の深淵こそが、神を知るための道である。*Séraphita* の中で、バルザックは「『見者』と『信者』は地上の事物に向けられる眼よりも、もっと鋭い眼を自分の内部に発見する。そして、黎明を見る<sup>97)</sup>」と語っているし、*Louis Lambert* でも、人間は「おのれの『内部』による光明との合体にまで達することができる<sup>98)</sup>」とある。従って、己れの中の無限の深淵の中に飛びこみ、現実生活から離れて神への道を進むものが、狂人であると言える。

セラフィタの勝利はランベールよりも輝かしいもので、彼女は実際に、天使とな

って昇天する。セラフィタは、眩いばかりの光に包まれて、無限に到る道を辿り、永遠の生に入っていく。肉を具えた創造物が、ついに、光の存在への変相を成し遂げたのである。

ただ、セラフィタは例外的な存在で、セラフィタに従っていったウィルフリッドとミンナは、惨めな肉体に縛りつけられて、神の世界の境界を越えることはできない。セラフィタの昇天を見届けた彼らは、束の間、肉の絆から解き放たれ、神の事象の意味を理解するが、再び元の肉の絆に戻っていくのだった。「不純」と「死」に再び捉えられ、彼らは天界からの「追放者」として、下方の世界の塵の中に帰らざるをえなかった。

しかし、アルベール・ベガンがウィルフリッドとミンナの結合によって、第二のセラフィタが生まれる可能性を見ている<sup>99)</sup>ように、*Séraphita*の結末は、人間の悲劇的な運命に、一条の希望の光を与えている。

Au dehors, éclatait dans sa magnificence le premier été du dix-neuvième siècle. Les deux amants crurent entendre une voix dans les rayons du soleil. Ils respirèrent un esprit céleste dans les fleurs nouvelles, et se dirent en se tenant par la main: —L'immense mer qui reluit là-bas est une image de ce que nous avons vu là-haut.

—Où allez-vous? leur demanda monsieur Becker.

—Nous voulons aller à Dieu, dirent-ils, venez avec nous, mon père?<sup>100)</sup>

生の消耗、死に脅かされ続けたバルザックにとって、セラフィタの昇天は、彼自身の夢であり、理想であった。彼は、時間から永遠へという絶えざる上昇を目ざした。しかしながら、生の躍動を身をもって感じ、小説の上で世界を創造することにより、神にかかわって天地創造を果たそうという意欲に駆られる一方、生の限界を意識し、挫折感をも味わっていた。そのためにバルザックの「意志論」は精神の高揚による至福の過程を辿りながらも、最後には、絶望的な死を迎える。『人間喜劇』の多くの作品が悲劇的な終わり方をしている理由はここにある。しかし、バルザックは死の中に暗さばかりでなく、新しい生の誕生を見ようとしているし、もし再生が果たされなかったとしても、一瞬の幸福に生きようとするバルザックの活力にあふれた態度が、『人間喜劇』を生命に溢れた作品にしている。

「意志論」は、このようなバルザックの思いが、理論的な形をまとって現われた

ものと言えよう。

( 註 )

Balzac の仏文のテキストの引用に関しては、ほとんどすべて、*La Comédie humaine*, collection l'Intégrale, aux Editions du Seuil, publié par Pierre Citron, 7 vols, 1979 による。この全集からの引用は、作品名の後に S., t. I, p. 50 のように略す。また、日本語訳の一部は、既訳のものを使わせてもらったが、東京創元社発行、バルザック全集 26 巻からの引用は、作品名の後に訳者の名、全集(1) p. 5 というように記す。なお、引用文中のイタリック体の部分はすべて、バルザックによるものである。

- 1) Préface à *La Peau de Chagrin*, S., t. VI, p. 708
- 2) *Sur Cathérine de Médicis*, S., t. VII, p. 241
- 3) バルザックは、ハンスカ夫人にあてた手紙の中で、『人間喜劇』の構想を述べた。  
(*Lettres à Madame Hanska*, Delta, 1967, t. I, p. 269–270)
- 4) *Physiologie du Mariage*, S., t. VII, p. 488
- 5) Georges Poulet, *Etudes sur le temps humain*, Rocher, 1976, t. II, p. 123
- 6) *Louis Lambert*, S., t. VII, p. 322
- 7) *l'Avant-Propos de La Comédie humaine*, S., t. I, p. 54
- 8) *Louis Lambert*, S., t. VII, p. 323
- 9) *ibid*, p. 298
- 10) *Lettre à Charles Nodier*, Conard, 1937, t. XXXIX, p. 563
- 11) *Louis Lambert*, S., t. VII, p. 298
- 12) *ibid*, p. 300
- 13) *Les Martyrs ignorés*, S., t. VI, p. 425
- 14) *Jésus-Christ en Flandre*, S., t. IV, p. 259
- 15) *Louis Lambert*, S., t. VII, p. 300
- 16) *Ursule Mirouët*, S., t. II, p. 479
- 17) *ibid*, p. 480
- 18) Moise le Yaouanc, *Nosographie de l'Humanité balzacienne*, Maloine, 1959, p. 161
- 19) *Ursule Mirouët*, S., t. II, p. 480
- 20) *Louis Lambert*, S., t. VII, p. 302

- 21) 『ルイ・ランペール』水野亮訳 全集(21) p. 266
- 22) *Louis Lambert*, S., t. VII, p. 303
- 23) *l'Avant-Propos* の中で、バルザックは次のように語っている。  
(...) le vainqueur de Cuvier sur ce point de la haute science, et dont le triomphe a été salué par le dernier article qu'écrivit le grand Goethe.  
(*L'Avant-Propos*, S., t. I, p. 51)
- 24) Lovenjoul, A 157, folio 52 (A 157; notes et fragments philosophiques manuscrits)
- 25) *ibid*, folio 101
- 26) *Les Proscrits*, S., t. VII, p. 278
- 27) *Séraphita*, S., t. VII, p. 345
- 28) 『追放者』河盛好蔵訳 全集(3) p. 241
- 29) *ibid*, p. 241
- 30) *Louis Lambert*, S., t. VII, p. 321
- 31) *ibid*, p. 321
- 32) *ibid*, p. 321
- 33) *Les Martyrs ignorés*, S., t. VI, p. 423
- 34) *Louis Lambert*, S., t. VI, p. 423
- 35) バルザックは、時には「*énergie*」、*«énergie vitale»*時には「*fluide nerveux*」等という言葉を使っているが、すべてこれらは意志 (*Volonté*) をさしている。
- 36) *Physiologie du Mariage*, S., t. VII, p. 435
- 37) *Jésus-Christ en Flandre*, S., t. VI, p. 525
- 38) *L'Enfant Maudit*, S., t. VII, p. 33
- 39) *Un Drame au bord de la mer*, S., t. VII, p. 33
- 40) *Sténie ou les Erreurs philosophiques*, Courville, 1936, p. 123
- 41) 『ルイ・ランペール』水野亮訳 全集(21) p. 264
- 42) *Le Cousin Pons*, S., t. V, p. 208
- 43) 『従姉ベット』水野亮訳 全集(19) p. 109
- 44) George Poulet, *Etudes sur le temps humain*, t. II, p. 124
- 45) *Théorie de la Démarche*, S., t. VII, p. 593
- 46) *Louis Lambert*, Corti, 1954, t. I, p. 81
- 47) *Louis Lambert*, S., t. VII, p. 300
- 48) 『ルイ・ランペール』水野亮訳 全集(21) p. 264
- 49) *Louis Lambert*, S., t. VII, p. 322

- 50) *Albert Savarus*, S., t. I, p. 362
- 51) 『ルイ・ランベール』水野亮訳 全集(21) p. 241
- 52) *Splendeurs et Misères des Courtisanes*, S., t. IV, p. 424–425
- 53) *Théorie de la Démarche*, S., t. VII, p. 587
- 54) *Louis Lambert*, S., t. VII, p. 321
- 55) *Théorie de la Démarche*, S., t. VII, p. 587
- 56) *Facino Cane*, S., t. IV, p. 257
- 57) *Louis Lambert*, S., t. VII, p. 322
- 58) *Séraphîta*, S., t. VII, p. 346
- 59) *Lettre à Charles Nodier*, Conard, 1937, t. XXXIX, p. 564
- 60) *Melmoth Réconcilié*, S., t. VI, p. 537
- 61) *La Recherche de l'Absolu*, S., t. VI, p. 663
- 62) *Les Proscrits*, S., t. VII, p. 282
- 63) *Séraphîta*, S., t. VII, p. 361
- 64) *ibid*, p. 336
- 65) 『セラフィタ』沢崎浩平訳, 国書刊行会, 1976, p. 29
- 66) *La Peau de Chargin*, S., t. VI, p. 437
- 67) Préface à *La Peau de Chagrin*, S., t. VI, p. 708
- 68) *Séraphîta*, S., t. VII, p. 354
- 69) 「近代興奮剤思考」山田登世子訳『風俗のパトロジー』新評論, 1982, p. 155
- 70) *La Peau de Chagrin*, S., t. VI, p. 437
- 71) *Albert Savarus*, S., t. VI, p. 437
- 72) *Les Martyrs ignorés*, S., t. VI, p. 425
- 73) *Physiologie du Mariage*, S., t. VII, p. 484
- 74) *La Recherche de l'Absolu*, S., t. VI, p. 618
- 75) *Les Martyrs ignorés*, S., t. VI, p. 427
- 76) *La Peau de Chagrin*, S., t. VI, p. 483
- 77) *Louis Lambert*, S., t. VII, p. 319
- 78) *Les Martyrs ignorés*, S., t. VI, p. 424
- 79) *La Recherche de l'Absolu*, S., t. VI, p. 636
- 80) *La Cousine Bette*, S., t. V, p. 45
- 81) *Les Martyrs ignorés*, S., t. VI, p. 424–425
- 82) *La Peau de Chagrin*, S., t. VI, p. 511

- 83) «cerveau hydriaque» については,  
*Les Martyrs ignorés* (S., t. VI, p. 425) に言及されている。
- 84) *Théorie de la Démarche*, S., t. VII, p. 593
- 85) *Gobseck*, S., t. VI, p. 128
- 86) 『あら皮』 山内義雄・鈴木健郎訳 全集(3) p. 212
- 87) *ibid*, p. 213
- 88) *La Peau de Chagrin*, S., t. VI, p. 516
- 89) *ibid*, p. 453
- 90) *Lettres à Madame Hanska*, Delta, 1967, t. I, p. 355
- 91) *Lettres à Madame Hanska*, Les Bibliophiles de l'originale, t. III, 1969,  
p. 615
- 92) *Correspondance*, Garnier, 1962, t. II, p. 500
- 93) *Sur Cathérine de Médicis*, S., t. VII, p. 241
- 94) George Poulet, *Etudes sur le temps humaine*, t. II, p. 171
- 95) *Melmoth Réconcilié*, S., t. VI, p. 540
- 96) *Théorie de la Démarche*, S., t. VII, p. 583
- 97) 『セラフィタ』 沢崎浩平訳 p. 178
- 98) *Louis Lambert*, S., t. VII, p. 323
- 99) Albert Béguin, *Balzac lu et relu*, Seuil, 1965, p. 75
- 100) *Séraphîta*, S., t. VII, p. 375